

市内でおいしいコーヒーを飲もうと思ったとき、皆さんはどこに行きますか。コンビニやコーヒー専門店など、たくさん選択肢がありますね。

お店では複数のサイズから選べて価格も異なりますが、同じMサイズでも入っている量はどのお店も一緒なのでしょうか。量ったことはありませんが、おそらく店ごとに決められており、ある店は割高だったり、またある店は値段の割においしいコーヒーだったり、とさまざまでしょう。

今回はお薦めのコーヒージョップの紹介。ではなく、容積を量る道具・枡ますのお話です。

## 古代の「枡」

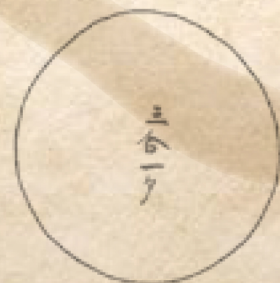
枡は中国から日本に伝わりました。平城京(奈良県)の井戸跡から出土した枡は陶器製で、コップの形をしています。底部には「三合一しんごういつ」と記され、枡であることが分かります。

養老2(718)年に編さんされた基本法典・養老律令では、変形が少ない

# 郷土の扉

The gateway to local history

## 枡の歴史



平城京の井戸跡から出土した陶器製の枡の実測図

銅製の枡で容積などを量るように決められています。しかしながら銅は高価だったため、多くの人は木や陶器製のものを使用していたようです。陶器は焼いた時に収縮してしまい、正確に量ることはできません。そのため、基準となる銅製の枡で陶器製の枡にどのくらい入るかを調べ、使用したものと考えられています。枡は公正に税を徴収し、律令国家を維持する目的を果たすためにも使われていたのです。

### 複雑な中世の枡

中世になると、地域ごとに枡の大きさが変化。同じ1升でも、容積が全く異なるものが使われるようになります。京都の東寺というお寺では、中世の頃に使用された枡が17種類もありました。1番大きな枡の1升は、1番小さな枡

の1升の、約3倍もの容積がありました。

なぜこのようなことになったのでしょうか。それは、東寺の領地が全国各地にあり、地域によって枡の大きさが異なっていたからです。正しい1升到換算するといくらになるかをすぐに計算する必要があり、地域で使われている枡と同じ物を17種類使用しました。さらには、同じ領地でも田によって枡の大きさが異なる場合もありました。作り手の技術やその土地の土壌、地形などによって収量が異なるといった耕作条件、年貢米の利用目的の違いに合わせた枡が作られたのです。

そうすると、枡は単なる計量器具ではなく、領主と農民における年貢の収納に関する合意の証拠という扱いになっています。農民が年貢に不満を持

つと、決別の印として枡を壊し、一揆を起すこともありました。一揆を終わらせる交渉の際には、両者立ち合いの上、枡の大きさを決めました。

この頃の霧島市内には大隅国くぐが衛や大隅正八幡宮、島津荘の領地があったので、枡の大きさもそれぞれ異なっていた可能性があります。

次第に、当時の人々もあまりの複雑さに嫌気が差します。室町時代によく、地域ごとの枡で量られた米を商業用の枡に換算して流通させるようになります。これにお墨付きを与えたのが豊臣秀吉です。

豊臣秀吉が行った太閤検地では、この商業用の枡が使われました。後に京枡と呼ばれるようになったこの枡が、現代の1升しよは約1・8びつとなるのです。

(文責 坂元)



単人歴史民俗資料館所蔵の枡(下が一般的な枡、上が酢用の枡)